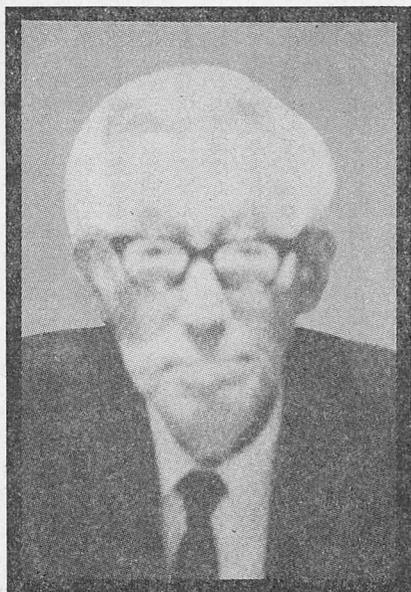


大矢全節氏を弔す

中野 操

昭和五七年七月二六日、永年の盟友大矢全節氏が亡くなられた。私の家の向かいに大矢夫人の妹さんが住んでおられるので、時どき顔をあわすたびに病状をたずねたりしてきたが、大矢氏の住居は、京都大阪のちょうど中間にあたる枚方（ひらかた）という街にあるため、つい御見舞もせずにした。

昭和の初めごろから戦中にかけて、大阪の皮膚科集談会や懇



親会などで顔をあわすことがしばしばであった。その頃われわれは、大阪皮膚科の三人男という戯称で呼ばれていた。大阪皮膚科医界の長老格にあたる億川撰三先生と大矢氏と私との三人であるが、この三人が期せずして医史学が好きで、集談会や懇親会の席上などで、兎角その方面の話材を口にするので、いつからとなくそうした戯称がたてまつられたのであった。億川先生というのは、緒方洪庵夫人八重女の甥にあたる人で、明治初年の大阪の医学医事に詳しくかった。

大矢氏は語学が達者で中でもフランス語がお得意であった。たいへんな蔵書家で、別棟になった書庫には内外の書籍がうすたかく収蔵されていた。書庫は三段か四段になっていて高いところの本は梯子をのぼらねば取り出せなかった。あるとき大矢氏が二階の書庫で一番高くにある本を調べているとき、梯子がすべって氏は床上に落ちて腰を強打された。そのとき以来氏は前かがみに腰を曲げてしか歩けなくなってしまった。しかしそんなことを物ともせずその不自由な姿勢で各地での学会に出席されたばかりでなく、二回も海外視察に出かけられたが、その強靱な意志には感嘆のほかなかった。

昭和十三年の新春のことである。億川・大矢両氏と顔をあわせたととき、一つ皮膚科三人男で医史学趣味の会を興し、全国の同志に檄を飛ばして講演会や雑誌発行をやるうじやないかと企画した。そこでさっそく会名を杏林温故会・機関誌の名を「医譚」と定め、日本橋三丁目の松坂屋百貨店の大講堂を借りて盛

大に創立總會をあげた。昭和十三年三月一日であつたが、百數十人の参加者があり、また檄に応じて全国から入会する人が五百名をこえた。戦後杏林温故会の名を改めて日本医史学会関西支部とし会務を続行し「医譚」も号を重ねて通巻第七〇号に達している。会名は関西支部と名をかえたが創立の精神を汲んで今も会員は全国に及んでいる。

しかし大矢氏はもともとこうした実務的事務的なことは不得手であまり関与されず、だいたい私がとりしきつて来た。本会が永つづきしているのも一半の理由はその辺にあるうかと思ふ。

大矢氏は私よりも五歳ばかり若かつたのではないかと思う。積年の盟友に先立たれて私の心中まことに落寞たる思いで一ぱいである。聯か弔文を認めて同君の英霊に捧げたいと思う。どうか安らかに御冥福を祈る次第である。

(昭和五七・一〇・一五)

大矢全節（おおやぜんせつ）先生略歴

明治三四年二月一日生。大阪府出身。大阪府立四條畷中学、第六高等学校を経て昭和三年京都帝国大学医学部卒。皮膚微生物学教室（松本信一教授）に入り、同七年講師嘱託、財団法人田附興風会北野病院（大阪市）皮膚科科长、医学博士。同十一年より一年間パリ大学医学部研修。同二十年北野病院退職。同二

五年国立京都病院皮膚科部長、同四五年同院退職。同五七年七月二日死亡（肝硬変）享年八一歳。

昭和十二年より日本医史学会会員でその後理事。同二二年国際医史学会会員、同三四年フランス医史学会会員、同三三年大阪医科大学医史学教授。同三六年フランス政府よりコンマンドール章被授。著書に『仏和医語辞典』（昭和八年）をはじめ伊和、タイ語、西日、ラテン語、ロシア語、英語などの多数の辞典編集があり、『世界泌尿器科学史』（昭和十三年）など医史学関係の著作も多い。